

『わたしとロータリー』

『紫陽花や はなだにかはる きのふけふ』 正岡子規の句です。紫陽花は、日本原産の花だそうですが、今のような色とりどりの花ではなかったようです。ヨーロッパに渡り、品種改良されて、私たちが見るような鮮やかな花となったようです。平安時代から短歌や芭蕉の俳句にも詠われていますが、もう一つで、やはりこの一句に尽きると思います。紫陽花の花言葉は移り気です。鮮やかな花が、時間や場所でさまざまに変わるさまを子規自身の気持ちと病状の変化にうたっていると解釈しました。



この対極にあるのが、ロータリーだと思います。ロータリーは 100 年以上経過していますが、基本理念は全く変わっていません。

本日は、自己紹介を兼ねて私とロータリークラブとのかかわりについてお話ししたいと思います。これからの話しは、ほとんどが失敗談ですから、私とすれば恥を忍んで話しています。だから、もう二度と話すことはありません。私は、若く見えますが 68 歳で充分年寄りです。和歌山市の田舎育ちで、浪人生活のすえやっとの思いで兵庫医大に拾ってもらいました。本当に拾ってもらったと思っています。こちらに来て、初めて阪急電車に乗ったときには、世の中にこんなにきれいな女性達がいるのだと驚きました。大学では、再試験ばかり受けているぼんくら医学生でした。自分でもよく卒業出来たと思います。当時は、さっさと研修を終えて、田舎に帰り、どこかのんびりした病院で生活できればいいなと思っていました。本当に、ちゃらちゃらした考えです。今も、ちゃらちゃらしていると突っ込みが入りそうですが。

生活が一変したのは、麻酔科の研修を終えて小児科の医局に入っただけでした。その年に、結婚し、女の子が生まれたのですが、その子が 10 ヶ月の時に高熱を出し痙攣が止まらずそのまま意識が戻らなくなったのです。この時小児科医の私は、全く無力で何もできなくおろおろするばかりでした。大学病院に入院し、脳死状態が 1 年弱続きました。当時、家内はずっとつきっきりで、大変な苦勞をかけました。このため、いまだに私は頭が上がりません。

この件で、私はハンマーで思いっきり頭を殴られたように感じました。「おまえは一体何をしているのだと」神様に叱られた心境でした。長女が亡くなった後、教授にお願いし、臨床の勉強のため市中病院へ出させていただきました。長女への済まないという後ろめたさがあったため、思いっきり勉強しました。30 代後半から 40 代前半までは、西宮回生病院に勤務し主に小児の救急疾患を見ていました。この頃が、私の人生のハイライトで、思いっきり臨床経験が出来ました。ほぼ一人で、夜間救急を受け持っている、痙攣や意識のない子ども達がはこばれて来ます。糖尿病の子どもが意識障害で運ばれてきたときには、誰も教えてくれないので横に救急の本を置きながら治療しました。意識が戻った時の喜びは、何物にも代えがたい感動でした。しかし、このような生活が長く続くわけはありません。いつ過労死で倒れるかも知れないと、家内に訴えました。そして、死ぬ前に思い切って西宮市に開業することになりました。誰にも迷惑をかけないのんびり出来る場所を選び、今津浜に、開業しました。これからは、もう余生なのだ自分に言い聞かせ、何の目的もなく空虚に暮らしていました。そこに当クラブの丸山先生からお呼びがかかりました。丸山先生は、私の恩師で、兵庫医大の助教授をされている時に直接に授業を受けたことがありました。私にとって、仰ぎ見るような人で、先生と直接話が出来るとは、大変な喜びでした。二つ返事で、甲子園ロータリークラブへの入会を決めました。この決断は、私の人生を大きく変えました。

それまで、私は患者さん以外の人たちに何か奉仕をするという考えは全く持っていなかったもので、ロータリークラブの奉仕の理念が新鮮に感じたのと、生きがいを持てるようになりました。そして、もう一つの理念であるリーダーシップの發揮は、実行すると輪がどんどん広がっていきました。西宮市や兵庫県の小児科医会を代表するような仕事もするようになったのです。

この 15 年は、私の人生にとって大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。感謝致します。このたびの会長就任は、私の甲子園ロータリークラブに対する恩返しと考えています。

